

わが社のいち押し

日本木質技研(愛川町角田)は「世界でも唯一」とされる木材の精密加工を手掛ける企業です。この道一筋半世紀以上。「木材は工業製品には向かない」という概念を根底から覆そうとしています。その証拠に、木の加工で「コンマ台」の精度を当たり前に出しながら、各種の精密木材部品を生産。社員数4人ながらも「同業者はいません。世界でも精密木材加工は当社だけだと思います」(秋山忠社長)と胸を張ります。脱炭素への機運が高まる中、再生可能な木材部品に対する需要拡大をにらみ、利点や可能性を訴求しています。

■精度0・05ミリ

金属や樹脂と比べ、木材は湿度などの外部環境によって伸縮しやすく不安定なことから「工業製品には向かない」と言われます。しかし、秋山社長はそうした固定概念を強く否定します。

「(木は)軽くて長持ち、おまけに加工(切削)スピードが早いのが利点です。樹脂と比べても材料費も大幅に安いです」と説明。工業製品・部品の材料として普及する可能性は十分にあると言います。

湿度管理された工場では、計測器や音響機器などの部品を少量多品種生産。その種類は年間1000〜2000種類に及びます。中には精度



精密加工した木材の数々

0・05ミリの部品も。これらは特別な設備ではなく、樹脂加工工業が使用する一般的な工作機械で仕上げられます。「木材だから精度が出せない」ということは、決してありません」とも付け加えます。

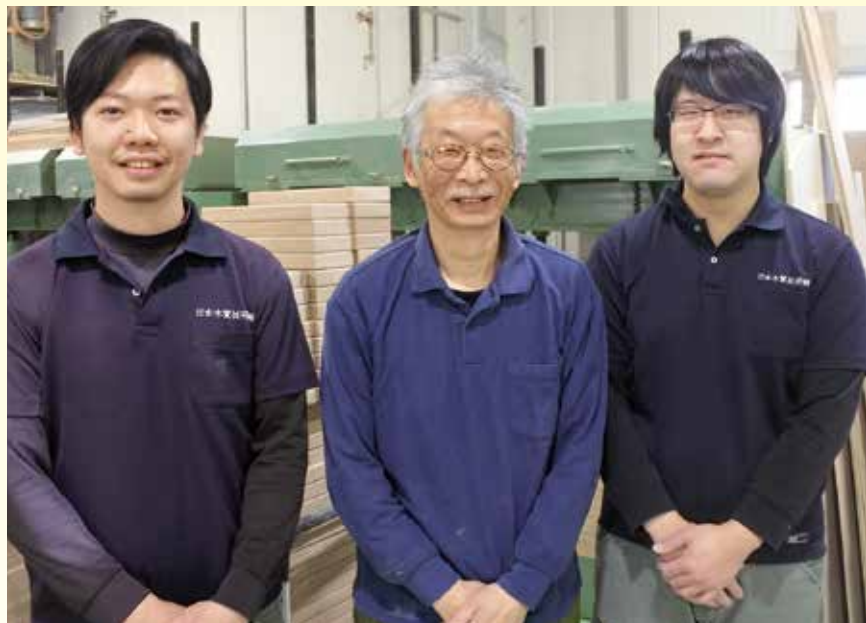
■高度なノウハウ必要

とはいえ、木材の精密加工は、高度なノウハウと熟練技術が不可欠です。この道半世紀近くの秋山社長でさえ「いまだに満足していない」という奥深さです。

というのも、木材は不安定な材料であることに加え、針葉樹や広葉樹など、木の種類、産地によって特性が全く異なります。そのため、例えば、刃物で削るにしても、木目の方向やセルロース成分の状態などを十分理解

「世界でも唯一」の木材精密加工企業

日本木質技研(株) 代表取締役 **秋山 忠さん**



加工技術の追求に余念がない秋山社長(中央)

し、それによって加工方法を調整しなければなりません。「経験値と勘がものをいいます。同時に、海外企業には決してマネができない分野です」。

これまで手掛けた木材は、国産や外国産を問わず100種類以上。「とにかく、材料ごとに実際に加工してみたらどうなるかを体得し、その変化を理論的に説明できなければ技術は身に付きません」と、秘けつを明かします。

■脱炭素も追い風

現在、注力しているのが精密木材部品の用途開拓です。例えば、同じ

電気製品でも、筐体の一部に木材を使うだけでも印象が変わります。高級感を出したり、ぬくもりを感じてもらったりもできます。さらに、木材に難燃剤を浸透させて、燃えにくくすることも可能です。

「消費したら植林します。その過程で二酸化炭素(CO₂)の吸収効果も得られます」と、秋山社長は強調します。脱炭素やSDGs(持続可能な開発目標)に対する関心が世界的に高まる中、小さな町工場が編み出した精密木材加工技術に注目が集まりそうです。